

## 小特集①

## 第 62 回神宮式年遷宮

## はじめに

2013 年 10 月、第 62 回神宮式年遷宮の一連の祭事が終了した。20 年に 1 度行われる式年遷宮は、持統天皇下で始められ、その第 1 回は内宮で 690 年、外宮で 692 年に営まれた。戦国時代などに中断があったものの、約 1,300 年の歴史があるとされる。内宮と外宮における式年遷宮は、当初は別々の年に営まれていたが、1585 年の第 41 回式年遷宮から同じ年になっている（中日・名古屋 10/4）。遷宮では、内宮と外宮の正殿を始めとする 66 の社殿や鳥居などのほか、714 種 1,576 点もの神宝や調度品も新しくする。そして、新しくなった社殿へのご神体を移す「遷御の儀」が中心的な祭事である。遷宮が行われる理由について定説はないが、常にみずみずしく、原初への回帰が繰り返されるとの意味合いが含まれているとされる（朝日・名古屋・夕 10/1、中日・名古屋・夕 10/2、毎日・名古屋 10/3）。

本稿では、遷宮で営まれた諸儀のうち、その遷御の儀を特に取り扱うが、遷宮自体は 8 年がかりで 33 の祭事が営まれるものであり、遷御の儀はその 28 番目に当たる。そのため、本稿ではまず、第 62 回式年遷宮にて執り行われた主な祭事を概観するところから始めたい。そして次に、遷御の儀に参列した人々について、その特徴と、そこから報道された政教分離の問題に触れる。また、以上の諸儀が種々に報道されたことはもちろん、今回の式年遷宮では「平成のおかげ参り」と称されるほどの参拝者数を記録しており、そこに焦点を当てる記事が目についた。この点につき、参拝者増加の詳細とその背景、注目された祭事、外宮前の再興、伊勢周辺交通と観光施設にもたらした影響をまとめることをもって、第 62 回神宮式年遷宮へと向けられた報道のまなざしを確認したい。

## 1. 式年遷宮の主な祭事

2005 年 5 月、新しい社殿の用材伐採および搬出の安全を願う「山口祭」から、今回の遷宮における諸々の祭事が始まった。33 の祭事は大きく「造宮祭」と「遷宮祭」に分けられ、上記山口祭から、2013 年 10 月 1 日に営まれた新正殿の平安を祈る「後鎮祭」と、改められた装束や神宝などを読み合わせる同日の「御装束神宝誂合」までが前者、26 番目の祭事に当たる「川原大祓」以降を後者とする。

山口祭と同月、新正殿の床下に用いる心御柱の用材を伐採する「木本祭」が、翌 6 月には、ご神体を入れるための器に用いる木を伐採する「御杣始祭」が営まれた。2006 年 4 月には、神社殿の造営を開始するにあたり、作業の安全を祈願する「木造始祭」が、2008 年 4 月には、新しい社殿の造営地で営まれる最初の儀式である「鎮地祭」が営まれている。ほか、種々の祭事が行われ、2013 年 7 月、後述するお白石持行事にて、新社殿の敷地に、崇敬者らによって白石が敷かれた。同年 9 月に営まれた「心御柱奉建」と、同年 10 月、新正殿へのご神体を移す遷御の儀は、遷宮にまつわる諸儀の中でもとりわけ重要視されているものであるが、それらの意義と内容については、本号「宗教専門紙の記事から」10 月分をご参照いただきたい。遷御の儀の翌日午前に「大御饌」と「奉幣」、同午後

れる「古物渡」<sup>こもつわたし</sup>、「御神楽御饌」<sup>みかぐらみけ</sup>、「御神楽」をもって、式年遷宮は幕を閉じる（読売・名古屋 10/1、中日・名古屋 10/3、中日・名古屋・夕 10/3）。以下、遷御の儀について、特に内宮における特別参観者に関する報道を中心に取り上げる。

## 2. 遷御の儀への特別参観者

今回の遷御の儀は、内宮で 10 月 2 日、外宮で 10 月 5 日、それぞれ午後 8 時から行われた。内宮への一般参拝は、同日午後 1 時に打ち切れ、政財界や文化人などの特別参観者約 3 千人が、参道沿いの席から祭事を見守った。皇室からは秋篠宮殿下が代表として参列されている。ほか、天皇陛下の勅使として掌典職<sup>しやうてんしやく</sup>の長と、宮内庁楽部らが参列。20 年前の遷御の儀においても、筆頭宮宅である秋篠宮家の当主が遷御の儀に参列されたが、40 年前は秋篠宮家がなく、当時の筆頭宮宅の当主である常陸宮殿下が参列されていた。天皇陛下においては、儀式が行われる時間帯に、皇居<sup>しんかでん</sup>の神嘉殿前庭から神宮に向けて遙拝の儀を行われた（産経・東京 9/28、産経・東京 10/2）。

安倍晋三内閣総理大臣と閣僚 8 名が、内宮の遷御の儀に参列した。現職首相が遷御の儀に参列するのは、1929 年の浜口雄幸首相以来 84 年ぶり。戦後には 3 回の式年遷宮があったが、同祭事での首相参列は今回が戦後初めて。これが憲法の定める政教分離に反しているかについて、菅義偉官房長官は、10 月 2 日に行われた会見で、同儀式への首相参列は、私人としての行為であり、本人が個人的に行ったものであるために政教分離の原則に反するものではないと説明している。

今回の首相参列は、宗教専門紙と一般紙で、ともに波紋を起こしている。容認論では、首相の正月参拝は定着しており、2013 年 1 月 4 日にも参拝し、国民に受容されていることから、今回の参列についても、伝統や歴史、あるいは日本人の習慣に基づいた参拝の延長と論じられている〔→『ラク便り』58 号 26 頁参照〕。対して、首相が私的参拝を強調するのは政教分離に抵触するおそれがあることを自覚しているとし、さらには閣僚らを引きつれての参列をしておきながら、「私人」と称することに違和感を表明する声も聞かれた。同様に、高い支持率を得ている状況で、首相が節度を失っているのではないかとの懸念も報じられている（朝日・東京 10/3、読売・東京 10/3、東京・東京 10/4）。なお、キリスト教界からの抗議については、本号「宗教専門紙の記事から」10 月分を参照。

## 3. 平成のおかげ参り

伊勢市にある神宮司庁によると、神宮への参拝者数は、1896 年の統計開始以来、2010 年が過去最高で、年間 882 万人であった。2013 年は、遷御の儀が執り行われる以前の 9 月末時点で、既に過去最高を更新する 951 万 5,670 人。これは 2012 年の同時期よりも、約 317 万人の増加とされる。2013 年の参拝者数の内訳は、内宮が 609 万 4,792 人、外宮が 342 万 878 人であり、9 月だけで計 116 万 2,060 人の参拝者があったという。また、今回の遷宮では、若者や女性の参拝者が目立つと各紙で報じられている。その背景について、なおも根強いパワースポットのブームの影響を指摘するもの、東日本大震災を経験したことによって、日々に漠然とした不安がつり、神秘や本質的なものへの関心が高まっている、あるいは日本人としてのアイデンティティを希求していると指摘するものなど、様々に論じられて

いる（産経・大阪 9/22、朝日・名古屋・夕 10/2、毎日・名古屋 10/2、毎日・名古屋 10/3）。

参加者の多さで耳目を集めた行事は、2013年7月26日から9月1日まで、一月あまり続いたお白石持行事であろう。最終日である2013年9月1日には、地元奉獻団と神社関係者らで作られる特別神領民の計1万8千人が参加、同行事の述べ参加人数は約22万6千人となり、前回よりも約2万6千人の増加であった（伊勢・津 9/2）〔→『ラーク便り』60号22頁参照〕。なお、お白石持行事を行った御白石奉獻本部ならびに御白石奉獻団連合会の終了式が、12月2日、伊勢市のいせシティプラザで行われた。同式には、本部役員や奉獻団長ら約150人が出席している（毎日・三重 12/3）。

前回の式年遷宮の際に整備された、内宮門前に位置する「おかげ横丁」の気もさることながら、近年では、外宮前の活性化が著しい。外宮への参拝者は、しばらく年間130万から180万人台で推移していたが、2010年には約230万人に増加。また、内宮における2012年の年間参拝者の増加が前年比2.3%の微減であったのに対し、式年遷宮を紹介する「せんぐう館」の開館があった2012年には、外宮参拝者が約250万人に伸び、同12.2%増加している。続く2013年については、先述の通りである。10年前には約40軒だった外宮前の店舗も約60軒に増え、一時期には地域住民向けの商店街になっていた外宮前が、再び観光客を呼び込める門前町へと回帰している。これまでは内宮のみに参拝して帰ってしまう人が多かったが、2012年4月7日の「せんぐう館」開館、および外宮から内宮へと参拝するのが正式な順序であるとする積極的なPRにより、人の流れが変わったと言われる（中日・名古屋 10/4、読売・三重 10/4、毎日・名古屋 10/4、中日・三重 10/5）。「せんぐう館」への入館者は遷御の儀を終えた後も多く、2013年10月25日、前年4月7日の開館以来の入館者が80万人を突破。2013年9月には8万2,679人で月間最多となる入館者があり、同月22日、1日の最多入館者数である4,653人が館内を賑わせた（中日・三重 10/26）。

遷宮が周囲の交通業界に与えた影響も大きく、神宮への玄関口とされるJRならびに近鉄においては、それぞれ、遷宮にあわせた観光用の特急や臨時急行を運行するなど、参拝者を当て込んだ経営を行っている（朝日・名古屋 10/1）。とりわけ、遷御の儀を前にした2013年9月30日には、神宮への玄関口であるJRならびに近鉄の両伊勢市駅において、両職員による初めての合同清掃が行われた。普段は業者に委託している清掃活動を、JR側からの呼び掛けで行った形である（中日・三重 10/1）。神宮へ参拝する人々の存在、ひいてはその増加を感じさせるのは、鉄道のみならず、タクシー業界でも同様である。県タクシー協会によれば、2013年7月ごろから、平日のタクシー利用者が大幅に増加しているとされ、遷御する前の正殿へと参拝する人々に手応えを感じている。同じく参拝者に利用されるバス会社においては、内宮の遷御の儀に参列する特別参観者を、各駅や宿泊施設へ送る臨時バス60台を用立てた（中日・三重 10/2）。

津市内のシンクタンクによれば、三重県内における2013年の消費支出総額は、遷宮関連の交通費・宿泊費・飲食費など計3千億円に近付くと試算されている。また、東海3県におけるレジャー施設について、夏休み期間の集客数の増加率を見ると、神宮にほど近い二見プラザ（伊勢市）が86%の増加をみせてトップ。ほか、三重県内の多くの施設で観光客が増えたとされ、式年遷宮の波及効果が報じられた（朝日・名古屋 10/5、伊勢・津 10/6）。

## おわりに

第 62 回式年遷宮に関する報道で目を引くのは、諸儀の詳細はもちろんのこと、参拝者の記録的な増加と、その参拝者の呼び水となりうるキーワード群である。信仰の側面から式年遷宮を報じるものは必ずしも多くなく、遷宮にまつわる祭事に「自然」や「生命」、「活力」、「永遠」や「循環」といった意味を見出しつつ、東日本大震災からの復興や景気の低迷からの脱却を掲げ、日本の再生へと論を繋げる記事が散見される（たとえば産経・大阪 9/22、産経・東京 9/30、毎日・名古屋 10/3、伊勢・津 10/3）。

今回の遷宮では、内宮の南部に位置する宮域林で育てられたヒノキが、約 700 年ぶりに使用されたことも報道された。江戸中期以降より、造営には長野・岐阜県境から得た木曽ヒノキを用いるようになっていたのだが、今回の造営では、その約 2 割を宮域林のヒノキで賄っている。（中日・名古屋 9/29、中日・名古屋 10/1、産経・大阪 10/2）。本稿の冒頭で述べたように、式年遷宮は、再生や循環などに意味付けられた、常若と回帰の祭事であるという。その象徴的な意味合いが、今日の社会情勢に引きつけられて、各紙で報じられていた。

[文責：今井信治]